＼発見！／

おごおり遺産

No.41 如意輪観音立像

12年に一度、巳年のみ拝観できる横隈・如意輪寺のご本尊。今年４月、その姿を見るため、多くの人が訪れました。

小郡市横隈には、「かえる寺」の愛称で親しまれている如意輪寺があります。令和７年４月、その本尊を納めている厨子の扉が開かれ、如意輪観音立像が12年ぶりに人々の前へ姿をあらわしました。

桜や紅葉が美しい如意輪寺

清影山如意輪寺は真言宗御室派の寺院です。江戸時代の文書「元禄十年井上組寺社開基」（1697年）によると、孝謙天皇の勅願（天皇の祈願）により、奈良時代前期の天平元（729）年、行基によって開基されたと伝えられています。江戸時代になると何度か衰退しますが、久留米藩主や地元の支えによって何度も再興し、周辺地域から厚い信仰を受ける寺院となりました。

そんな如意輪寺の本尊が、如意輪観音立像です。平安時代後期（12世紀後半）に造られたと考えられるヒノキの一木造りの仏像で、顔は１つ、腕は６本の一面六臂という姿です。如意輪観音像は坐像（座った姿）と半跏像（片足を組んで座る姿）が多く、如意輪寺の本尊のように立っている姿は全国的に見ても非常に貴重です。

如意輪観音は人々を苦しみから救い、名前の通り「意の如く（＝思うままに）」知恵や財宝、幸せをもたらすと信じられています。小郡周辺では、「観音講」として主に女性がお世話をし、安産・授乳を見守る子安観音としても広く信仰されてきました。

造られた時代が古いと考えられること、その美術性や地域性などが評価され、昭和52（1977）年、この像は県指定有形文化財（彫刻）となりました。

なお、この本尊は秘仏であり、12年に一度巳年のみ、その姿を拝観できます。

如意輪観音立像の姿（イラスト）

令和７年４月６日、桜の花びらが青空に舞う中、御開扉の大法要が執り行われました。

朝９時半、インド・中国の仏僧と裃姿の地元住民、「レイショウ」と呼ばれる鈴を持った御詠歌の女性たち、色鮮やかな稚児衣装をまとった子どもたちと保護者、首から大きな黄色いお守りを下げた長寿行列、総勢250名ほどが三国小学校の校庭を出発し、旧道を通って如意輪寺へ向かいました。寺へ到着すると読経があり、お清めを受けた関係者らが本堂に上がった後、姿をあらわした本尊の前で法要が行われました。

法要後、秘仏の姿を見ようと大勢の参拝者が列をなし、拝観した人々は「優しいお顔だった」「ご利益がありそう」と、喜びを口にしていました。

旧道を行く行列

稚児行列の様子

地域の人々をはじめ、多くの人が支え、守り伝えてきた如意輪観音立像。12年後の御開扉にも、ぜひ足をお運びください。

問 文化財課文化財係 ☎75・7555